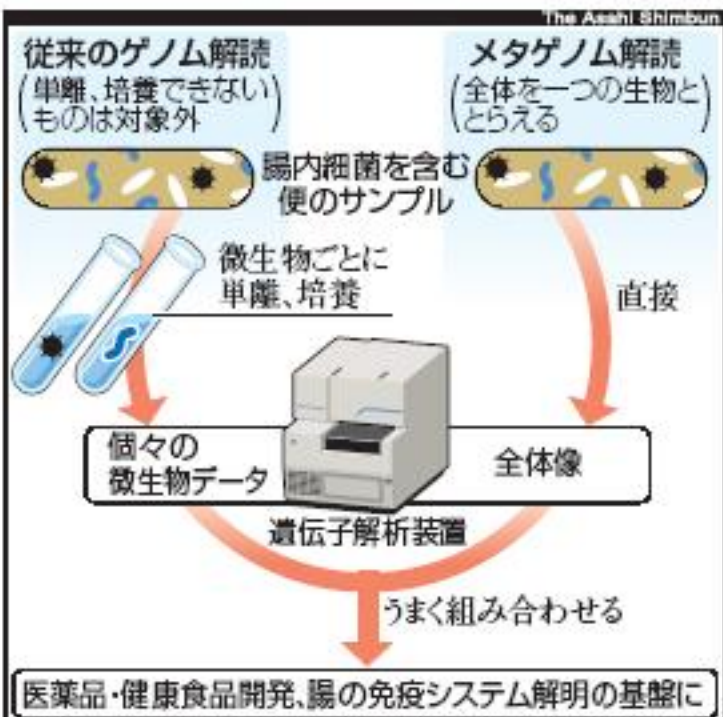


# ゲノム「一挙に」解説

## 腸内細菌 各国分担で研究

# 医薬品などに応用へ



人の腸や皮膚、口腔などにすみつく細菌のゲノム(遺伝情報の全体)を国際協力で解説しようというヒトメタゲノムプロジェクト構想が持ち上がっている。人間の病気・健康

に深くかかわっていると考えられている常在細菌について、膨大な遺伝子解析を共同作業で進め、免疫機構の解明や、医薬品や健康食品などの開発基盤づくりを目指す。

微生物のゲノム解説は通常、生物種ごとに単離(一つ一つ分離すること)、培養して、個々に遺伝子情報を得るが、千種類ともいわれる人の常在細菌は培養が難しいものが多く、同定されていないものがほとんどだ。

そこで、腸内細菌の遺伝子解説を各国で分担して進めることをまず検討している。

さらに新しい試みとし

**腸内細菌** 人の体に共生する常在細菌のうち腸内にす

みついた微生物で、重さは1%にもなるといわれる。病原性の細菌と違って免疫で退治されず、逆

て、腸内細菌を全体で一つの生物と考え、便のサンプルから遺伝子群を一挙に解説すること(メタゲノム解説)も計画されている。共生関係にある細菌同士の相互作用や協調しての働きなどの解明が期待できるという。

さまざま人のサンプルで、例えば、性別や年齢、病気・健康状態(がん、生活習慣病、アレルギー)、家族、生活様式、食品などの影響も調べる。腸の免疫システムの高い医薬品・健康食品の

開発、病気の予防や診断などにつながる可能性がある。

日本のほか、米国、欧州、中国などの企業や研究機関の関係者らが10月末、パリに集まり、基本合意した。今後、データ公開や知的財産のあり方などのルール作りも議論していく。

日本では、会議に参加した北里大の服部正平教授(ゲノム科学)を中心に、国内の大学など複数の研究機関からなる組織の立ち上げが進められている。服部さんは「学術分野はもとより、産業にも大きな波及効果があるだろう。日本は腸内細菌の研究が進んでおり、大いに貢献できる分野だ」といっている。

腸内細菌 人の体に共生する常在細菌のうち腸内にすみついた微生物で、重さは1%にもなるといわれる。病原性の細菌と違って免疫で退治されず、逆

(桜井林太郎)